
ローレライ

霧生 漣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ローレライ

【Nコード】

N4838F

【作者名】

霧生 漣

【あらすじ】

22世紀末、土星へも観光に行く時代になって尚、怪談と言つものはなくならないらしい。小惑星帯で資源開発に従事する船乗り達の間で密かに語られる噂。漆黒の宇宙に現れる幻とは……。

自サイトよりの転載です。

幼い頃、そこには夢と希望が溢れているのだと思っていた。
ずっと、ずっと、憧れていた。

けれど、大人になって漸くたどり着いた宇宙には、夢も希望も、何もなかった。

あつたのはただ、漆黒の闇と永遠のような孤独。

どこまでも続く闇、その中で瞬く無数の恒星の光はあまりにも微かだった。何処までも、何処までも、この全てを飲みつくすような闇は広がっていた。誰もが知っているように、この宇宙にも果てはある。だが、それは途方もない距離、途方もない時間を経た遙か彼方。

この広い宇宙の中で、人はあまりにも孤独だった。

そして、夢や希望だけを見つめていられるほど、宇宙は優しくもなかった。

『なら、どうしてあなたはそこにいるの？』

どこまでも続く闇の中で、時折、幻が俺に語りかける。その幻は、時には俺の姿で、時には別れた恋人の姿、数年前に死んだ姉や、地球にいる両親、友人、宇宙で死んだ同僚、様々な姿で俺に問いかける。

何故、宇宙こそにいるのだ、と。

この手の幻は、ある意味で船外活動員（EVA）にとっては職業病みたいなもんらしい。この職に就くとほとんど例外なく誰もが遭

遇するという。人類が月どころか土星へも観光にいく二十二世紀の現代においてなお、怪談と言うものはなくならないということなのか。

通称は誰がつけたか、ローレイ。地球の古い伝説にあやかった名前だ。俺達の間では“ローレイには気をつける”って格言もあるほど広まっている。ローレイに気をとられて危うく命を落としそうになった奴や、実際に死んじまった同僚もいる。面白い事に、ローレイとの初めての遭遇はこの仕事を続けていくかどうかの試金石になっている。辞める奴は、大抵ローレイとの最初の遭遇で辞めちまう。それでも辞めなかった奴だけが、宇宙うちに残る。だから宇宙にいる奴らは必然的にローレイ遭遇率が非常に高い。にもかかわらず、この話題はほとんど外に漏れた事はない。

それはきつと、ローレイが俺達の不安や恐れ、そういった弱さが具象化された姿だからなのだ。

この美しい幻を死の影と呼ぶ連中がいるのも、分かる気がする。

こんな非現実的なのは、地上で口にする話題じゃない。

きつと、宇宙そふにいる連中にしか、理解できない。

彼らは何故か決まって船外活動時に現れる。一世紀も前の宇宙飛行士と違って、俺達は普通に数十時間に亘って宇宙空間へと出る。

口にするのはチューブから流れ出る水と味気ない流動食だけ。自分以外にはロボットや単純な機械類しかそこにはいない。状況によっては太陽風による軽い電波障害が起きて母船との通信もままならない。見上げる先には深い闇。そんな時は、恐ろしいほどの孤独感に襲われる。一時的なものだとは分かっていても、一分一秒が途方もなく長く感じられる時がある。

そういう時に、彼等はよく現れる。

そして、異口同音に尋ねるのだ。

何故、宇宙にいるのか、と。

夢も希望もないというなら、何故、星へ帰らない。

死と隣り合わせの宇宙ではなく、何故、安穩と暮らせる地上へ帰らないのか、と。

俺は、その問いに答えられたためしがない。

理由なんて、ないからだ。

そんなもの、俺にだって分からない。

ただ、ここにいなければならぬ気がした。

ここでなければならぬ気がした。

ずっと、ここだけを見て生きてきた。

今更変えろと言われても無理だ。

いや、違う。

変えようと思えば、本当はいつだって変えられた。今からだって、地球で仕事を探すことは出来る。

けれど……。

姉は宇宙旅客機スペースプレーンの事故で死んだ。

木星に旅行へ行った姉は、小惑星帯で船ごと消息を絶った。6年経った今も、遺体は発見されていない。

姉の事故の所為もあって、けして口には出さないが両親は俺が宇宙で働く事を辞めてほしいと願っている。俺はその事を知っているが

ら、気付いてない振りをし続けている。

恋人とも、仕事の所為で別れた。

いつ死ぬかも分らない仕事は辞めてくれと、そう言われて、俺は仕事を選んだ。彼女が純粹に俺の実を案じていてくれた事を理解しながら。

同僚の死も、幾度か見た。

予測できなかったフレアや観測不能の微小デブリのせいだけじゃない。ちよつとしたミスが宇宙では即、死に繋がった。

けれど、何故だろう。

いつだって、どうしても辞める気にはなれなかった。

幻が問いかけるのは俺自身の思いだ。きっと、この仕事を続ける者達が共通に抱いている思い。辞めてもおかしくないような要因なら今まで沢山あった。

それなのに、辞めずに今も俺は宇宙にいる。

何故だ？

その問いに答えが、出た事はない。

スリルを求めている訳じゃない。

親を悲しませたい訳でもない。

それほど給料が良いというわけでもない。

今更、憧れと言うわけでもない。

きっと、どんなに探しても理由なんて見つからない。

理由なんて、どこにもないんだ。

たぶん、これから何があっても俺は宇宙での仕事をやめないだろう。

もしも、それに理由があるのだとしたら、唯一つだけだ。

愛してるから。

とても陳腐な言葉になってしまいが、それが答えだ。

昔も、今も、俺はこの宇宙が好きだからだ。漆黒の闇が広がる、深い孤独を感じさせるだけの、良い事なんて何も無い宇宙。それでも俺は宇宙を嫌いになることなんて出来やしない。

それこそ、理由なんてない。

ただ、幼い頃夢見たこの宇宙に、俺は今も魅了され続けてるんだ…。

(後書き)

宇宙空間に浮かぶ幻って何か良いなあ、という思いから生まれた短編SFです。

2年ほど前からサイトで公開していました。

文章や設定等拙い点多いですが、思い入れの強い作品なのでほぼそのままの形で転載しました。

感想等いただければ嬉しいです。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4838f/>

ローレライ

2011年10月5日13時21分発行